招待席

Ugrino

田中龍太

佐世保から別府まで、片道約二時間半の道のりだった。途中、チェーンスモーカーの父親がサービスエリアごとに立ち寄っては一服するほか、休憩や食事を挟めば優に三時間は超すだろう。

崇は金立サービスエリアのトイレにて、小便をしている男たちを背に、個室の扉が開くのを待っていた。タバコを喫い終えた父親が手洗いに来て崇の姿を認めても、もはや何も言わない。おそらく父親は、崇が小用でも個室を使うのを知っている。早々と用を足した父親は売店の方へと向かって行った。

ゴールデンウィークで高速の渋滞こそ免れたものの、駐車場に停めるまで二十分以上待たされた。それでも、崇の両親は文句ひとつ垂れるでもなく、むしろこの道中を愉しそうに過ごしていた。本来ならば沖縄か広島辺りへ旅行する計画を立てていたふたりに、別府にある古書店を訪ねてみたいと崇は切り出した。

何なら、俺ひとりで行くから、お父さんたちは旅行を楽しんできて――。崇の申し出に、ひとしきり思案したあとで母親は、こう返した。

「そいやったら、ゆったり温泉に浸かるとも良かね」

父親も同意し、そのまま親子三人で出掛けるかたちとなった。どうやら、崇ひとり別行動させることに危惧を覚えたらしい。

いつも行く店に、その男はいた。

夕飯までの腹ごなしに、崇は同級生たちと唐揚げやたこ焼きなどをテイクアウトし、食べ歩きしながら帰るのが日課だった。初めのうちは店内で食べていた。けれども長年使いこまれたカウンターは油膜が張り、いくら従業員が布巾で拭っても、べたついて不快だった。頓着せずに肘を突き、顔を伏せるクラスメイトにも嫌悪を感じ、それ以降、持ち帰って食べるよう崇が促したのだ。そのせいで周りからは潔癖症とからかわれたが、崇は意地でも我を通した。

作業着姿の男は大抵テーブル席におり、遅い昼食か、あるいはかなり早めの夕食の膳を掻き込んでいた。丼ものを頼んだときには陽灼けした太い腕を拡げ、顔で蓋するような豪快な食べっぷりだった。

そうした光景を、崇が見つめていたからだろうか。男は帰りしな、決まって崇をじっと見据えて立ち去るのだった。崇

の連れには一瞥もしないにも拘らず。
「お前、狙われてんじゃないの」
狙われる、とは、どういうことか。もちろん、同級生たちの揶揄するところは解っていた。
それから崇は、その店へひとりで訪れた。果たして男はいた。崇が注文し、番号札を渡されテーブル席に就くのを見て取るや、男は定食の載った盆を抱え、何の断りもなく同じ卓に座ってきた。
接触してくるだろうとは予期していた。何が目的なのかは知らないが。
「きょうは、ひとり、かな」
「いつもひとりですよ」
図らずも本音が口をついて出た。崇の答えに、男は笑って、それから穏やかに諭す。
「そがんこと言うったいね。友だちが聴いとったら、どがん思うやろうか」
崇は考え込む。あれが友だちなのだろうか。常に行動を共にする中で、冗談を言い合ったり、相談に乗ったりするのは崇も苦痛ではない。しかし、そのたびに崇の影が一枚、また一枚と剥ぎ取られてゆくようで、ひどく倦んだ気持ちになるのも事実だった。
男はアジフライに醤油をかけ齧りつく。口の縁に生やした髭に、衣が付いていた。今度は箸で味噌汁を掻き交ぜる。底に沈殿していた麹が浮上し、再び表面は落ち着きを取り戻すも、上澄みには油が浮いていた。崇は思わず眼を伏せる。咀嚼しながら男は話す。
「おいは、いつも君のことば見とったよ」
それならお互い様だ。だから崇も、何かしら引き寄せられるように、ひとりで店に来たのだ。ただ、男の語調は幾分熱く、粘りがあった。
「君はいつも友だちに囲まれとるばってん、みんなと喋りながら、どっか違うことば考えとるごと、おいには見えとった」
得体の知れない者から図星を指され、崇はうんざりした。ただし、薄気味の悪い者になら何を話してもいいという開き直りもあった。
「生きていたくないなあ、って思ってるだけですよ」
「またそがんこと言って。みんな悲しむやろうが」
コロナ禍が収束に向かいつつあり、マスクの着用も自己判断に委ねられた。崇はワクチンを一度も受けていない。国民みなが接種のために騒いでいるのを眺めるにつけ、彼ら彼女らは、自分には生きている価値があると声高に主張しているようで不気味だった。
「今晩、皿山公園で逢おうで」
ふいに男が切り出した。絡みついてくるような眼差しに、崇は、おや、と思う。が、あえて聴こえなかったふりをし、またもや戯れ言を重ねる。
「でも、死ぬ理由もないからなあ」

同時に店員が崇の番号を呼んだ。崇は札を持ってレジカウンターに向かう。その背中へ、男は尚も囁く。
「待っとるけん。来いよ」

慣れない土地で食事処を探すのも難儀だからと、父親は次に停まったサービスエリアで早めの昼食を摂ろうと提案した。フードコートだと混雑するのを予想していたが、同じ敷地内に本格的なイタリアンの店があり、そこへ入った。それでも店内は、やはり大型連休中とあって席の大半は埋まっていた。通されたのは庭と、その向こうに国道の見える窓際の席だった。

父親は着席するなり、ざっとメニュー表を眺め、これ、と指差す。
「おいは、こいにするけん頼んどって。タバコ吸ってくっけん」

早々と注文を決めた父親は店を出、喫煙所へと歩いてゆく。母親は、その後ろ姿を見つめ、何やら可笑しそうに笑う。
「お父さんね、崇が積極的になってきたごたる、って嬉しかとよ」
「へえ……。おれは、これにする」

何事にも無感動な息子が、たかだか別府の古書店に関心を示した程度で、両親の眼には際立って映るものらしい。時刻は十一時半だったが、次第に店内は混み始めてきた。

三人分同時にオーダーしたが、先に崇の注文した海老のクリームパスタが供された。手を付ける前に、髪の毛が一本混じっているのに気が付いた。父親が店員を呼び、取り換えてもらうよう催促した。しばらくして、先程の店員が戻ってきて釈明する。
「申し訳ありません。ほかのお客様の商品を、こちらへ優先いたしますので少々お待ちください」

言葉は丁寧だが、慌ただしく立ち働く店員の口調は、どこか横柄なものだった。その後、運ばれてきた料理を目の当たりにしても、崇の食欲はとうに失せていた。もしや髪の毛を取り払い、盛り付け方を変えただけなのでは、と崇は訝った。あの一本の生理が犯していた食べ物を、崇は無言で食べ終えると、そのままトイレに行き、口腔の奥へ指を差し込んだ。

高校生にもなって夜遊びもしない崇が、親の眼を盗んで家を出たのは十一時過ぎのことだった。田舎なので、この時刻になれば街灯も乏しい。男の指定した皿山公園の皿山とは、九州各地にある陶磁器の産地に付けられることの多い名称であり、ここ佐々町にもあった。

窪んだ皿のイメージに、なぜ山が付くのか奇妙だった。いっそ椀山でも良さそうなものだ、などと取り留めもないことを考えていると、向こうから自転車が走ってきた。ライトが崇を捉えた瞬間、崇も相手の顔を凝視した。ペダルを漕ぐ者は驚いた様子で、すれ違う束の間スピードを落とすも、すぐさま加速し立ち去ってゆく。

ほどなくして、次は帽子に照明を取り付けた人物とも遭遇したが、こちらも崇を照らし出すと、不意を突かれたかのように面輪を歪めた。どうやら夜中に歩くにしては懐中電灯も持たず、蛍光色とは真反対の、黒のジーンズと長袖シャツという服装のせいで、不審に思われたのだろう。

崇はと言えば、彼らの一様に示す相貌に、ひどく興味をそそられた。弛緩していた表情が、ふいに闇より現れた自分に対して戸惑う様を、崇は観察して愉しんだ。

男から一方的に告げられていた場所と時刻に、わざと三十分遅れで到着した。公園横の直売所には一基だけ煌々と輝く街灯があり、駐車場には男の物と思しき一台の軽乗用車が停まっている。

もし、ここで崇が無言のまま引き返しても、一向に構わないのだった。男と崇の繋がりなど、何もないのだから。そこでつと崇は、男がどれほど自分を待ち続けられるか、試してみることにした。正確には、そういうかたちで男を測ることに崇は並々ならぬ関心を抱いた。実際に眼の前で会うよりも、こういった会いかたをする方が、より一層崇の心を弾ませた。

強い風が吹き渡った。雲が薙ぎ払われ、月明かりが射す。四月の終わりとはいえ、夜になると肌寒い。いい加減、帰ろうかと踵を返した拍子に、男に呼び止められた。

乗り込むと、男は無言で車を走らせる。人気のない展望台の方へと登ってゆくらしい。前方は鉛の夜に包まれ、ヘッドライトが光を撒き散らしながら、その濃密な闇を掻き分け進む。春は桜の名所としても知られる土地だが、いまは鬱蒼とした樹々が枝を揺らすばかりだ。

突き当りで男は停車した。

シートベルトを外し、男は崇に向かい合う。

「どがんして欲しかと」

膝を擦る手のひらの熱に、崇は快楽とは程遠い戦慄を覚えた。改めて男を見遣ると、昼間に会ったときとは異なり、身綺麗にしていた。灰色のパーカーに薄茶のコーデュロイのパンツを穿いて、短く刈り込まれた頭髪からはシャンプーの匂いがした。髭も剃ってきたらしい。が、男が顔を寄せ、唇を啄み始めたころには、崇は吐き気を堪えるのに精一杯だった。固く閉ざした崇の口許を舐り、男は愛し気に囁く。

「舌ば出して」

ようやく口唇を開くと、男は崇の歯列をなぞり、口蓋を撫でまわす。仕方なしに崇もそれに応じた。すると男は気を良くして、唾液を送り込む。男は髭が濃い質らしく、顎が崇の頬を掠めるたび、細かな錐で刺戟してきた。

崇は相手の舌を吸いながら、殺してくれないだろうかと願っていた。性は疎ましい。他人も自分も疎ましい。やがて男の手は、崇の下肢へと伸びてゆく。人に触られて勃起したことがない――そんな事実を、いちいち話すのは面倒だった。

一時を回ったころ、目的の古書店である書肆ゲンシシャに辿り着いた。崇は事前に、ホームページで店内の様子を閲覧

していたが、想像していたよりも手狭な空間だった。灯りは点いたままなので扉を開けようと把手を握るも、入り口のガラス窓に貼り紙があった。

［只今、留守にしております。御用のある方はこちらまで］

見ると、携帯電話の番号が記されている。父親が掛けると、店主は、すぐ近くにいるので待っていてくれと言う。隣は喫茶店で、それを見た母親が指差す。

「もしかしたら、ここでお昼ごはんでも食べよらすとかもね」

すると背後から、お待たせしました、と声がし、振り返ると店の主が鍵を取り出していた。その姿を眺めた母親は崇に耳打ちする。

「若い人がやってるのね」

店に入る際、玄関で靴を脱ぎスリッパに履き替えるよう告げられた。それから店主は、幾分早口に利用時間と料金についての説明をした。こじんまりとした店内は明度の仄かな照明で保たれている。

「おいは外で時間潰してくるけんか、ゆっくり見よってよかよ」

父親は入店せずに周囲を散策するという。長時間の運転で疲れているのだろう。崇と母親だけ、利用することになった。ワンドリンク付きのため、最初に何を飲むか訊かれ、崇はメロンソーダを、母親はアイスコーヒーを頼んだ。

崇が店内の本棚を物色している間、母親はしげしげと辺りを見回していた。そして店主がグラスを置くのを見計らい、おもむろに質問しだした。

「あの、どうして、こういったお店を開かれているんですか」

店主は答える代わりに母親へ尋ねる。

「ＳＮＳなどをご覧になられて来たのでは」

「いえ。息子が行ってみたいと言うので、わたしは着いてきたまでです」

母親の疑問は、確かに至極もっともな問いなのかもしれない。学齢前の子供とほぼ等身大の関節人形。陳列ケースには、世界一美しいと称されるモルフォ蝶の標本が妖しい輝きを放つ。鏡に嵌め込まれた時計と、その横の女性の顔は時間が来ると眼が動き、覗いていた人間の驚く表情を映す。

書肆ゲンシシャは地元の人々が足繁く通う店というより、どちらかと言えば観光客が物珍しさに訪れる、如何わしい雰囲気を具えた古書店なのだ。

しばらくは母親も、崇に付き合っていたが、出されたアイスコーヒーを一息に飲み干すと立ち上がった。

「すみません。御手洗は」

「こちらにはないんですよ」

店主の言葉に、むしろ安堵した様子の母親は、一礼すると崇を残して店を後にした。

それから崇は少ない小遣いの中、目ぼしい書籍を探した。コルタサルの『石蹴り遊び』は高くて手が出せなかったが、

絶版となっている河出文庫の『澁澤龍彦初期小説集』は安価なので購入した。すると店主は澁澤の直筆原稿を見せてくれた。

文芸を好む崇は、けれども正直な話、作品にこそ惹かれるものの、作家本人にはさして関心がない読者だった。それでも店主の計らいを無碍には出来ず、眺め入るふりをしていた。

「澁澤がお好きでしたら、ヨーロッパの古城の写真集もありますよ」

そう言って、店主は次々と分厚い本を何冊もショーケースの上に並べる。

「こちらは同性愛者や異性装者の写真集です」

崇がページを繰ると、そこには同性同士で抱き合いキスをする人物たち、男は女を装い、女は男の出で立ちのスナップが収められていた。

「幻想文学も、よく同性愛を描きますよね」

何気なく呟いた崇のセリフに、さも愉快気に吹き出す店主がいた。

「確かに。そうですね」

面白い発言とばかりに笑う店主に、崇はふと、この人は死んでいるのではないか、との想念に駆られた。実際は死んでいるにも拘わらず、生きているふりをして悦楽に耽っているように、崇には視えた。少なくとも崇は、そうした夢想が現実と地続きの、鮮やかな手触りとして感じられたのだ。

「あの、木水彌三郎の詩集はありますか」

ふいに頭に浮かんだ書き手の名前を、崇は口にした。ここの店主ならば、知っているかもしれないと思ったからだ。

「以前、お客様に販売したことがあります。入荷いたしましたらご連絡しますよ」

案の定、店主は伝票を確認するまでもなく、空で答えた。それに対して、崇は曖昧に返事を濁す。稀覯本の類で、とてもじゃないが自分には購える代物ではないからだった。つと店主が微笑んでいることに気づき、崇は首を傾げた。店主は尚も可笑しそうに弁解する。

「いえね。こちらに来て、本を買われる方は少ないので」

そうこうするうちに、利用料金に含まれる一時間が経とうとしていた。欲しい本は手が届く範囲で買えたが、まだ崇は、ここを訪れた本来の目的を果たしていない。店主は崇とガラスケースを挟んで向かい合い、自らも気ままにカタログのようなものを捲っている。

「あの。実は、古写真が見たくて……」

おずおずと崇が伝える。途端、店主は伏せていた顔を真正面から崇に向けた。

「さっきは、母がいたので、なかなか切り出せなかったんですが」

崇が述べた意を察し、店主は店の奥にある納戸のようなスペースに直行した。そして古びた巾着を一つ携え、崇の許へ戻ると手袋を嵌めるよう促し、自身も慎重に中身を扱う。とうとう眼にすることが出来るのかと、はやる気持ちで崇はビ

ニール手袋を嵌めた。焦れったさにもたついていると、低い声音で店主が、片方の手だけで結構ですよ、と告げる。
「こちらは口唇口蓋裂傷の女性の一葉です。裏には亡くなられた年月日が記されています」
震える手で、崇はモノクロのそれを見つめた。いわゆる、みつくちと呼ばれる、上顎の大きく裂けた女性は、口腔内部を露わにしていた。この女性は生前、周囲からどれほど好奇の視線に晒されたことだろう。まっとうな感覚を持つ人間ならば、眼を背けたくなるこれら奇形者の古写真を、崇は一心に眺めた。
不思議と精神が凪いでゆくのが解り、求めていたものを眼にして崇は穏やかな心地になる。
「確かに、ご両親がおられる前では鑑賞するのに抵抗がありますよね」
店主は静かに言い添えた。この古書店にあるシュルレアリスムの美術や文学、奇形者や西洋の死後写真などは崇の指向を如実に表していた。崇は異界のごとき書肆ゲンシシャにて、束の間、生を実感していた。その刹那、玄関の扉に取り付けられた鈴が鳴った。
崇は店主と同時に、そちらを見遣る。男性客か、ひとりの男が立っていた。店主は入店の際に崇へ述べた内容と同じ説明を、男にも与えた。だが、男は怯えた様子で立ち竦んでいる。その顔貌は外の陽射しで逆光となっており、崇は窺い知れなかった。
「また、あとで来ます」
男は店主に言い残すと、その場から去っていった。
店を出て、両親を呼ぶと母親が感想を訊いてきた。
「どがんやった？　なんか一緒に紙切れのごたるとば眺めよったばってん」
熱心に古写真を見つめていた自分を、知らぬ間に母親が覗いていた事実が崇の気に障った。けれども母親は、崇が楽しめたかどうか純粋に確かめたがっていただけだった。
せっかく温泉県とも呼ばれる大分まで来たのだからと、杉乃井ホテルに寄った。大型のシャトルバスが何台も停車しており、施設内は大勢の宿泊客でごった返していた。みなチェックインを待つ人々で、フロントに問い合わせると日帰り入浴は出来ないと断られた。
父親と母親は仕方なく、それぞれの職場への土産物を買い求めると、そのまま帰路に就くことにした。崇は、いくらか両親に申し訳ない気持ちになった。しかし、助手席に座っている母親は、これも一つの思い出と笑う。
「別府まで行ってお風呂にも浸かれんかった、って言うたら、あんたたち何ばしに行ったとね、って笑われるやろうね」
電光掲示板には、高速道で事故があり三十キロの渋滞、とあった。父親は舌打ちし、下道を通って帰ることになった。崇はふいに、あのとき書肆ゲンシシャに来店し、結局引き返していった男の姿が脳裏へ浮かんだ。次いで、その男がバイ

クに跨り、高速道にある中央分離帯を易々と越え、あたかも彼岸へと飛翔するかのような光景をも幻視した。男は対向車線を走る大型トラックの下敷きとなり、更には後続の車から続けざまに轢かれて……。

※

ここでわたしは一旦、キーボードを叩く手を止める。予ねてよりメールのやり取りをしていた作家の方から、同人誌『海』へ参加してみないかと誘われ、わたしはこれを書いていた。招待席は原稿用紙三十枚以内だが、今後わたしが同人に加わるかどうかは未定だった。

お誘いくださったのは書肆侃々房より小説や詩集、エッセイなどを出版されている井本元義氏だった。わたしは井本氏の一介のファンに過ぎず、けれども互いにハンス・ヘニー・ヤーンという、ドイツの作家の小説を愛読していたことで意気投合し、やり取りを始めたのだった。

タイトルはヤーンの数少ない邦訳のうちの、唯一の短篇集『十三の無気味な物語』白水Uブックス刊、訳者・種村季弘による解説から採った。

『ウグリノとは何か。おそらくUgrino＝Urgino(始原的に生まれたもの)のアナグラムだろうが、結社のあり処として想定されている場所は、人界を孤絶した島である。』

初め、わたしは批評めいたエッセイで茶を濁す心積もりでいた。けれども送った原稿は枚数が少なく、せっかくの招待席は一回のみだからと言われ、止む無く拙いながらも創作を試みている。

現在わたしは某出版社にて電子書籍を製作中で、その第一校正のゲラが届いたばかりだった。朱のマーカーでチェックが入れられた原稿には固有名詞、著作権、商標登録に関して細かな指摘があり、わたしは確認作業の手続きや、人物名をイニシャルに直したり、あるいは該当箇所そのものを削除したりと難儀していた。そのため、招待席の話が来たときも、編集長へ宛てて執筆の際に気を付けるべき点を尋ねたくらいだった。

先程まで執筆していた小説には、別府に実在する古書店・書肆ゲンシシャを描いた。七年前に一度訪れたきりで、その後の状況は解らない。コロナ禍により、利用料金が値上げされたとは店主のブログに記されてあった。

わたしはネットで店の電話番号を検索し、スマートフォンから掛けた。呼び出し音は長く、もう切ろうかと思い始めた矢先、繋がった。

「はい」

電話に出た相手は間違いなく店主のはずだが、店名を名乗らなかった。わたしは慌ててしまい、口ごもりつつ訊ねた。

「そちらは、書肆ゲンシシャですか」

「はい」

「あの、わたしは以前そちらにお邪魔した者ですが」

「そうですか」
プロの作家でもない無名のわたしは、どう切り出せば良いのか解らず、しばらく沈黙していた。それでも腹を括って、事の次第を説明した。今回小説を書くこと、その作中に書肆ゲンシシャを登場させること。それに対して許可を求めていること。
「いいですよ」
返事はあまりに呆気なく、たった一言で了承された。恐る恐る、実名で書いても構わないかと確認すると、またしても同じ返答。
「いいですよ」
こちらが何者なのか誰何もせず、いとも容易く請け合うので、わたしは些か拍子抜けした。店主は最後、それだけですか、そう訊き返してきた。わたしが礼を述べると、それでは、と通話は切れた。

〈完〉

【田中龍太氏プロフィール】
・平成三年生
・長崎県北松浦郡在住
・第三十回伊藤園お～いお茶新俳句大賞文部科学大臣賞